

『歐陽脩新発見書簡九十六篇－歐陽脩全集の研究－』

(研文出版、2013年2月、全226頁) の出版

研究代表者 東 英寿 (比較社会文化研究院)

■ 歐陽脩 (1007～1072)

おうようしゅう
歐陽脩は中国の宋代(960～1279)の人で、中国の文章の改革(古文運動)を行い、中国の考古学(金石学)というジャンルを創始し、詩の評論(詩話)を中国文学史上初めて執筆し、さらに今日の随筆という文章形態を本格的に始めた人物で、多数の詩文や歴史書も創作した、いわばマルチな文人です。政治的には副宰相にまで昇り、科挙の試験では試験委員長をつとめ、当時無名であった蘇軾、蘇轍、曾鞏等の有能な人材を発掘し、宋代の学術・文化に多くの影響を与えました。中国では中学・高校の教科書において、その作品が必ず取り上げられる有名な文人です。

■ 新発見書簡九十六篇

歐陽脩が活躍した時代は今から千年以上前で、その当時の日本に目を移すと平安時代、ちょうど紫式部が源氏物語を作成していた頃に当たります。千年以上前の中国の偉人である歐陽脩に、これまで全く知られていなかった書簡が残っているとは想像できません。中国、台湾、香港等、言い換えれば世界で全く知られていなかった書簡九十六篇を今回発見しました。これら九十六篇の書簡に校点を施すなど整理してまとめて掲載することが、『歐陽脩新発見書簡九十六篇－歐陽脩全集の研究－』出版の主な目的です。本書は、全体を上篇と下篇に分け、上篇では九十六篇の公開と九十六篇に関する3本の拙論を含めた四章、下篇では九十六篇の書簡を発見するに至った歐陽脩の全集研究に関連する拙論5本を収録した五章の合計九章によって構成されています。本書によって、千年の時を経て歐陽脩の新発見の書簡九十六篇が姿を表したことになります。

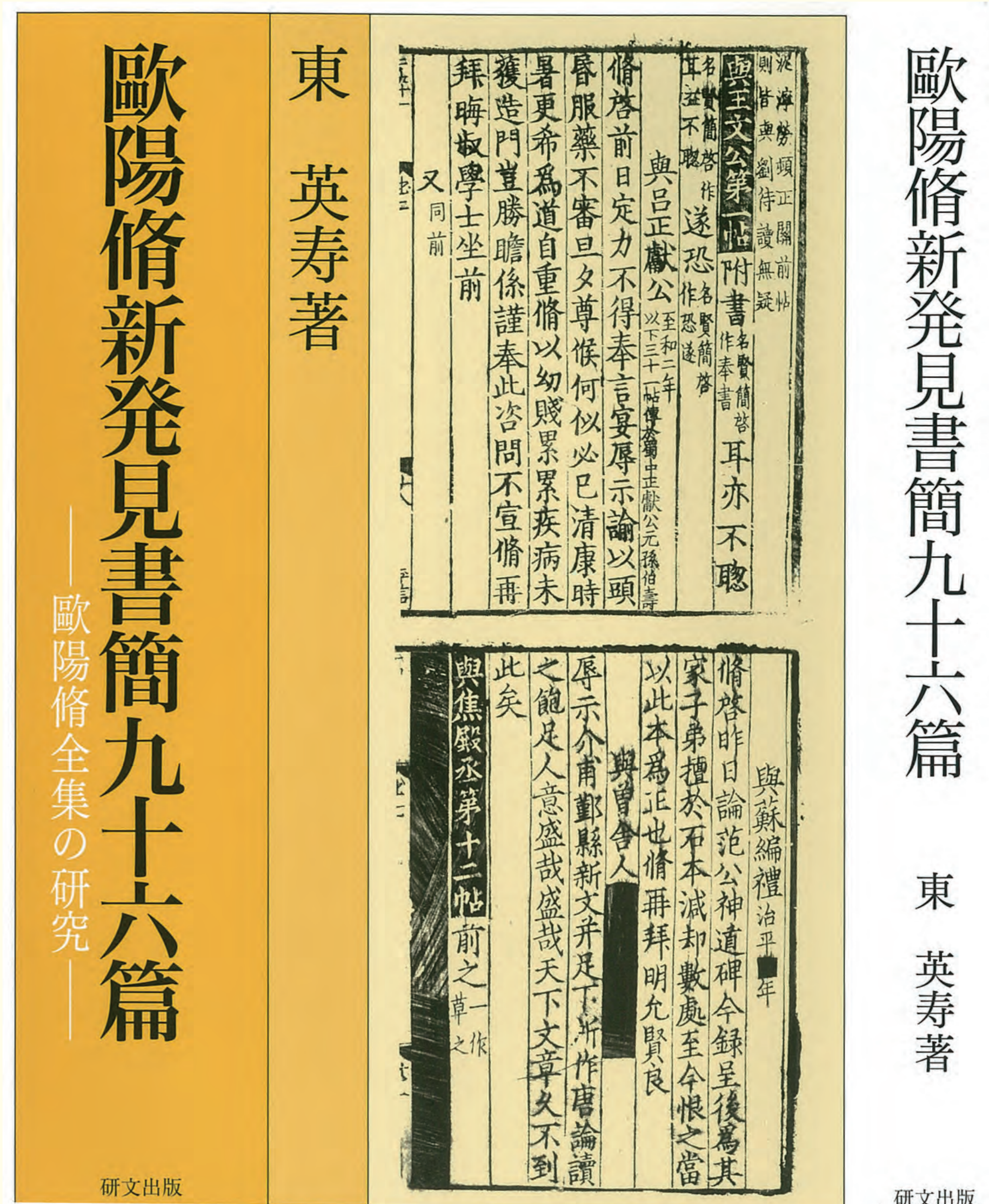
書簡発見の反響と本書の出版

2011年10月の日本中国学会で「歐陽脩の書簡九十六篇の発見について」と題して、研究発表を行いました。この発見については、朝日新聞、毎日新聞、読賣新聞、日本経済新聞、西日本新聞、山口新聞、熊本日日新聞、南日本新聞等に記事が掲載され、時事通信や共同通信でも配信されました。また、中国の国営通信・新華社が、「九大教授、中国宋代の文人「歐陽脩」の書簡を発見」と題して配信したことにより、長江日報、遼寧日報、広州日報、瀟湘晨報、陝西日報、羊城晚報、東楚晚報、文匯報、香港文匯報等の中国の多くの新聞に

転載され、人民網や新民網等の数多くのネットでも記事が引用されました。学会での発表が終わった翌日には、中国の人民日報の東京支局長から取材の申し込みがあり、10月14日に九州大学の本部で取材を受け、2011年11月14日の人民日報に発見の記事が掲載されました。また12月には光明日報の記者が取材に来て、2012年1月7日の光明日報に記事が掲載されました。

このように、海外、特に中国での反響は凄まじいものであり、これは千年以上前に生まれた歐陽脩という偉人の未発見書簡が存在していたという事実への驚き、しかもそれが九十六篇も大量に出てきたという衝撃、さらに本場の中国ではなく日本から出てきたという意外性、これらが合わさって巻き起こされたのだと考えられます。

中国の偉人・歐陽脩の新発見書簡九十六篇の、日本での初めての公開とそれに関連する研究をまとめて刊行したのが本書『歐陽脩新発見書簡九十六篇—歐陽脩全集の研究—』です。



『歐陽脩新発見書簡九十六篇—歐陽脩全集の研究—』(研文出版、2013年2月 発行 ISBN/ISSN 9784876363551)

このように、海外、特に中国での反響は凄まじいものであり、これは千年以上前に生まれた歐陽脩という偉人の未発見書簡が存在していたという事実への驚き、しかもそれが九十六篇も大量に出てきたという衝撃、さらに本場の中国ではなく日本から出てきたという意外性、これらが合わさって巻き起こされたのだと考えられます。

中国の偉人・歐陽脩の新発見書簡九十六篇の、日本での初めての公開とそれに関連する研究をまとめて刊行したのが本書『歐陽脩新発見書簡九十六篇—歐陽脩全集の研究—』です。



光明日報記事 (2012年1月7日)

研究領域

中国文学、特に歐陽脩を中心とする唐宋の文学
薩摩の漢学及び『漢学紀源』を中心とする日本漢学
中国少数民族・土家族の文学・文化

研究業績

(著書)

- 『歐陽脩古文研究』 (汲古書院、2003年1月、全410頁)
『復古與創新—歐陽脩散文與古文復興—』 (上海古籍出版社、2005年8月、全303頁)
『歐陽脩新発見書簡九十六篇—歐陽脩全集の研究—』 (研文出版、2013年2月、全226頁)

(論文)

- 「土家族の擺手節と茅古斯について」 (九州人類学報第30号、1994年12月)
「北宋初期における古文家と行巻」 (日本中国学会報第51集、1999年10月)
「『漢学紀源』と五山儒学史について」 (『蒼海に交わされる詩文』、汲古書院、2012年10月)

など。

2011年(平成23年)10月4日
九大・東教授 原刻本から96編
欧陽脩の書簡「発掘」
中国・宋代の文人、欧陽脩(1007~1072)の研究である九州大学院比較社会文化研究院の東英寿教授(中国文学)は3日、欧陽脩の書簡96編を発見したと発表した。人物像を把握する貴重な資料として日中の研究者に注目されよう。

西日本新聞記事 (2011年10月4日)

「日本で欧陽脩の書簡発見」
日本“发现” 欧阳修书信
2011/10/05 00:00:00 来源: YNET.com 北青网
新华社电 日本九州大学研究生院教授东英寿研究发现, 中国北宋著名文人欧阳修有96封书信未被编入明代定本全集。

中国北宋の文人
新たに書簡96編
11世紀の欧陽脩
九大教授、天理大所蔵文書から発見
中国・北宋時代の文人、政治家の欧陽脩(1007~1072)の未確認の書簡96編が、天理大学付属天理図書館所蔵の全集「歐陽文忠公集」(に載っていない)が見つかった。東英寿・九州大学院教授(中国文学)が見つけた。8、9日に福岡市東区の九大箱崎キャンパスで開かれる九州中国学会発表予定。

中国国営通信・新華社の記事 (2011年10月5日)

朝日新聞 (2011年10月4日)

読賣新聞 (2011年10月5日) 記事

欧陽修の書簡96編発見

中国・北宋の文人・政治家、欧陽修（1007～1072年）の未確認の書簡96編を、九州大の東英寿教授（中国文学）が発見した。天理大付属天理図書館（奈良県）所蔵の欧陽修の全集「欧陽文忠公集」（国宝）に収録されており、中国所蔵の全集と比較し初めて未確認と分かった。「千年前の中国著名人の書簡が96編も、しかも日本で見つかる」とは想定外」と東教授。福岡市の同大で8、9日ある日本中国学会で発表する。

九大の東教授

欧陽修は中国で詩の評論を初めて執筆したり、文体を改革する「古文運動」で活躍。古代の金属器や石刻の銘文を研究する「金石学」創始者でもある。

「欧陽文忠公集」は全153巻。12世紀の南宋時代以降の印刷・刊行で、書簡は144～153巻に収録。天理大の全集は鎌倉時代に日本へ渡来し、当時の図書館、金沢文庫に収められた。

天理大所蔵の全集に中国未収録



初期刊行本は天理本のほか、中国・北京の中国国家図書館所蔵本、宮内庁所蔵本が現存する。いずれも初版で1196年刊行とあるが、宮内庁本は書簡部分がない。全集はその後、明代に再編集され、決定版として現在に至る。

毎日新聞記事（2011年10月4日）

Report

「欧陽修書簡」なぜ日本で発見？ 鎌倉幕府が南宋の最新版購入

厳聖禾 文・写真

二〇一一年十月、日本のメディアによる一本の記事が中日両国の古代中国文学研究界に波紋を広げた。中国本土ではすでに伝承が途絶えていた北宋（九六〇～一二二六年）の著名な文人・欧陽修の書簡九十六篇が、意外なことに奈良県の天理大学付属図書館で発見された。これは一体どういうことなのだろうか？ さらに、この新発見にはどのような意義があるのだろうか？

長年にわたって中国古代文学を研究している九州大学大学院比較社会文化研究の東英寿教授がその経緯を説明してくれた。

原刻本考証で意外な発見

東教授の当初の目的は、欧陽修の書簡探しては無く、欧陽修全集のどの版本が南宋（一二七～一二九九年）の政治家・文学者の周必大が編さんした「欧陽文忠公集」の原刻本かを考証する

ことだった。中国国家図書館 宮内庁、奈良天理大学付属図書館がそれぞれ周必大編さんの原刻本を所蔵していると称していた。これに疑問を抱いた東教授はこの三種類の版本について比較研究を始めた。

細かく比較した結果、いずれも周必大の原刻本ではないことが判明した。その理由は、これらの「全集」の書簡部分はずべて後で追加された痕跡が見つかったからだ。さらに、これらの書簡を比較していた際、天理大学所蔵版本が、中国国家図書館所蔵版本、宮内庁所蔵版本と比べて書簡が九十六篇多いことを発見した。

これが新発見だということを確認するために、東教授はわざわざ中国国家図書館を訪れ、再調査に着手した。その結果、明の永楽十八年（一四二二年）に出版された「欧陽文忠公集」内府本、清の乾隆四十六年（一七八二年）に編さんされた四庫全書本、民国時期（一九一～一九四九年）の四部叢刊本など歴代の中国皇室 政府が出版した「全

大切にしている「欧陽文忠公集」を手にする東教授



集」にはいずれもこの九十六篇の書簡が収録されていないことが確認された。東教授はここで初めて、自分が大発見をしたという確信を持った。

歴史の書き直しが必要に

「欧陽文忠公集」は一千年来、教えきれないほど編さん・再版されてきたが、なぜ今になってこの書簡九十六篇が異国の日本で発見されたのか？ 東教授は次のように説明してくれた。これは中国国家図書館所蔵の版本が相対的に完全に権威があると考えられ、誰もがこの版本を読めば事足りたことと考え、他の版本と全面的に比較したことがなかったのが主な理由だろう。

周必大編さんの「欧陽文忠公集」が出版された後、後世の人が収集した書簡十九篇を加え、その増訂本が南宋皇室に献上され、明代（一三六八～一六四四年）に公開・出版された。それ以降、この版本が後世、欧陽修全集を修訂・編集する際の基礎となった。

しかし、上述の増訂版が誕生した後、新たに九十六篇の書簡が収集され、それらを加えた最新版の「欧陽文忠公集」が出版された。一方、鎌倉幕府は一二五九年、「金沢文庫」を設立するために、南宋に人を派遣して、大量の書籍を購入した。その中に、この最新版の「欧陽文忠公集」も含まれていた。その前の版本

がすでに南宋皇室に献上され、非常に重視されていたため、最新版は中国国内で次第に伝承されなくなり、逆に、日本では適切に保存され、今では、国宝に指定され、天理大学付属図書館の所蔵となっている。

それは、天理大所蔵の「欧陽文忠公集」の書簡九十六篇は、日本人によって偽造された可能性はないだろうか？ 東教授は引き続き、中国国家図書館が所蔵する他の版本の研究を続けた。その結果、ある版本に収録された書簡のうち三十三篇が天理大で発見された九十六篇とまったく同じだと気づいた。この発見によって、九十六篇が偽造ではないことが証明された。東教授の紹介によると、天理大の版本は南宋時代に出版されたものだが、ただ出版された年代は中国国家図書館所蔵本、宮内庁所蔵本より少し遅いそうだ。

今回日本で発見された欧陽修書簡は、中国国内の研究界で大きく注目されている。現在、上海の雑誌「中華文史論叢」はすでにこの九十六篇の全編掲載を決めた。また、天津南開大学中華古典文化研究所も東教授を講演に招聘した。東教授は「大量の欧陽修書簡が新たに発見されたことによって、これまで出版された欧陽修関連の全集、欧陽修の文章をすべて取めた『全宋文』などの宋代の歴史資料はおそらく書き直さなければならないだろう」と語っていた。

人民中国記事（2012年8月号）

研究課題：欧陽修新発見書簡九十六篇

研究組織：比文 審査部門：人社 採択年度：H24

整理番号：24502

種目：G2タイプ(学術図書)

代表者：東英寿(比較社会文化研究院 教授)